埼玉学園大学・川口短期大学　機関リポジトリ

<Translation> Historical Information on the Northern Yuan in Tārīkh-i Habīb al-Siyar by Khwāndamīr

メタデータ	言語: jpn
	出版者:
	公開日: 2016-03-10
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 赤坂, 恒明
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://saigaku.repo.nii.ac.jp/records/180

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

翻訳

ペルシア語史料における北元史関連情報

― ホーンダミール『伝記の伴侶』より、テムル・ハーン以降のウルグ・ユルトの条 ―

Historical Information on the Northern Yuan in *Tārīkh-i Habīb al-Siyar* by Khwāndamīr

赤　坂　恒　明　訳
AKASAKA, Tsuneaki

「北元」とは、日本におけるかつての通説的歴史叙述では、1368年に元朝が「滅亡」した後、モンゴル高原に残存した旧元朝勢力で、最後の元朝皇帝トゴン＝テムル・ハーンを「初代」として、第二代アユシリダラ、第三代トグス＝テムルと続き、トグス＝テムル・ハーンの殺害（1388）によって滅び、以後、モンゴル高原は、東の「タタール」（韃靼）と西の「オイラート[1)]」（瓦剌）が分裂して抗争する混乱期に入った、と概括されることが多かったようである。

しかし、分裂・混乱期においても、チンギス・ハンの後裔であるモンゴル皇帝（ハーン）が消滅したわけではなく、ダヤン・ハーンによる小統一をはさみ、最後の正統ハーン、リクデン（リクダン、リンダン）・ハーンの死去（1634）に至るまで、一時的な簒奪・中断はあったものの、ハーン位は連綿と続いた。近年は、1368年に元朝が漢地支配を放棄してモンゴル高原に北帰した後、清朝が内モンゴルを支配するまでの、正統ハーンがモンゴル高原とその周辺地域で活動していた時代を、「北元」と呼称することが多いようである。

さて、モンゴル史において、北元時代の前期は、史料が著しく欠如した時期である。第17代皇帝トグス＝テムルが殺害され、フビライ・ハーン直系のハーンが絶えた後、ダヤン・ハーンに至るまでの大部分の歴代ハーンたちは、正確な系譜が判然とせず、彼らの名前さえ史料ごとに異なっている、という有様である。

まず、漢文史料は、同時代史料またはそれに準ずる史料が全くないというわけではないが、前期北元史を系統的に述べたものは、現時点では存在が知られていない。一方、モンゴル文史料は、北元のハーンに関するまとまった記載がある最古のモンゴル文年代記として、著者不明『黄金史（アルタン・トプチ）』がある。本史料は、1620年代から1630年頃までに編纂されたものである（森川哲雄 2007）。編纂された時期が前期北元時代から年代的にかなり降り、また、記載内容には多分に口承伝承的な要素が強く、史料性において問題なしとするわけにはいかない。

ところが、北元史に関する同時代史料またはそれに準ずる史料として、チムール朝期のペルシア文史料がある。記載内容が極めて簡略であり、かつ、誤りも含まれてはいるものの、そこには漢文史料やモンゴル文史料に残されていない貴重な情報が含まれており、先学によって注目されているところである。

ペルシア文史料における北元関連情報を学術的に分析・検討した本格的な先行研究としては、まず、本田実信 1958 を挙げなければならない。そこでは、漢文史料とモンゴル文史料 —— 著者不明『黄金史（アルタン・トプチ）』とサガン・セチェン編『蒙古源流（エルデニイン・トプチ）』—— に加えて、四種類のペルシア文史料が取り上げられており、現在に至るまで、前期北元史を研究する上で必読の、最重要の研究文献として、高く評価される。

本田実信 1958 において取り上げられたペルシア語史料は、次のとおりである。

①ニザームッディーン・シャーミー

キーワード：モンゴル帝国、元朝、北元、ティムール朝、ペルシア語史料
Key words ：The Mongolian Empire, The Yuan Dynasty, The Northern Yuan, The Timurid, The Persian Historical Materials

『勝利の書（ザファル＝ナーマ）』
niẓām al-dīn-i šāmī, *ẓafar nāma.*
②シャラフッディーン・アリー・ヤズディー
『勝利の書（ザファル＝ナーマ）』
šaraf al-dīn ʻalī yazdī, *ẓafar nāma.*
③著者不明『テュルク諸族系譜』
šajarat al-'atrāk
④ホーンダミール『伝記の伴侶』
x^{w}āndamīr, *tārīx-i ḥabīb al-siyar.*

これらのうち、③『テュルク諸族系譜』と④ホーンダミール『伝記の伴侶』における北元関係の部分は、チムール朝の第四代君主ウルグ＝ベクが編纂した『四ウルス史』に基づいているとされる。両史料間には若干の相違があるが、チムール朝期のサマルカンドで編纂された同時代史料の叙述を引用している点から、同時代史料に準ずるものと位置づけることが可能であろう。

また、北元史の研究において、これらのペルシア文史料の一部の記載内容を間接的に使用した先行研究として、岡田英弘 1966 がある。そこでは、④ホーンダミール『伝記の伴侶』に拠ったペチ・ドラクロアの『大ジンギスカン史』Pétis de la Croix, *Histoire du Grand Genghiscan,* Paris, 1710, 1710, pp.515-516 が利用されている[2)]。

また、宮脇淳子 1983 には、本田実信 1958 と岡田英弘 1966 の研究成果をも反映させた、前期北元史の概括があり、有益である。

中国では、例えば薄音湖 1987 において本田実信 1958 の研究成果が使用され、「本田先生在蒙漢文史料基礎上増加了波斯文史料的利用，以三種史料相互対照，取得了超越前人的成果」とある。

また、安藤志朗 1994 において、チムール朝のもとに亡命したモンゴル皇子タイズィ・オグラン（モンゴル皇帝となったオルジェイ＝テムル・ハーン／本雅失里に比定される）について検討された際に、②ヤズディー『勝利の書』の記載が使用され、オルジェイ＝テムル・ハーンの経歴において初めて明らかにされた部分がある。

ペルシア語史料における北元に関する記載は、決して分量が多くはないが、このように多くの貴重な情報を含んでいる。

これらの諸史料のうち、④ホーンダミール『伝記の伴侶』は、長らくテヘラン刊本（Γiyāth al-Dīn bn Homām al-Dīn al-Ḥoseinī, *Tārīx-e Ḥabīb al-siyar fī axbār afrād al-bašar.* vol. Ⅲ. Jalāl al-Dīn-e Homāʻī / Moḥammad Dabīr-e Siyāqī (ed.), Tehrān, 1333 / 1954）が使用されていた。サクストンの英訳（Khwandamir, *Habibu's-siyar.* Tome Three. Part One. Genghis Khan—Amir Temür. Translated and Edited by W.M.Thackston. Published at The Department of Near Eastern Language and Civilizations, Harvard University, 1994）も、このテヘラン刊本に基づいている。

私は、2004年９月、イスタンブル İstanbul において写本調査を行った際、スレイマニエ図書館（Süleymaniye kütüphanesi）で、『伝記の伴侶』の良質の二写本、Damad İbrahim Paşa 901、および、Reisülküttab 638 を閲覧する機会を得た[4)]。この調査により、テヘラン刊本にはテュルク＝モンゴル語の固有名詞に誤りが多く、直接、写本を使用すべきであることを、確認することができた。スレイマニエ図書館所蔵の二写本は、それぞれの本文テキストに一長一短があるが、両者を校勘することによって、さしあたり、より適切な校訂本文を作成することが可能となる。

そこで、本稿では、ホーンダミールの北元に関する記載、具体的には、テムル・ハーン以降のウルグ・ユルトの条を、スレイマニエ図書館所蔵の前記二写本に基づいて訳出する。「ウルグ・ユルト」とは、モンゴル皇帝（ハーン）が支配した、モンゴル帝国・元朝と北元を併せた呼称である。そのため、そこには、北元の前に元朝に関する記載も含まれている。

凡例

ホーンダミール『伝記の伴侶』x^{w}āndamīr, *tārīx-i ḥabīb al-siyar* における、テムル・ハーンより後のウルグ・ユルトの皇帝たち、すなわち、元朝および北元のハーンたちの条を、スレイマニエ図書館（Süleymaniye kütüphanesi）所蔵の Damad İbrahim Paşa 901［DIP910］写本（ff.592b-593a）を底本にして、同 Reisülküttab 638［RK638］写本（f.31b）によって補った校訂テキストから訳出する。

訳文

テムル・ハーン tīmūr qāān の死後、ウルグ・ユルト uluγ yūrt（大帳）において

汗位の王座に座した、のこりの皇帝たちの名［について］の言及[6]

（dikr-i asāmī-yi sāyir-i pādišāhānī ki ba'd az fawt-i tīmūr qāān dar uluγ yūrt bar masnad-i xānī nišasta and[5]）

カラ＝コルム qarā qurum とケルレン kalūrān のハンたち[7]の本紀（dāstān-i xānān-i qarā qurum wa kalūrān）の序章（muqaddama）に書き記された（marqūm-i kilk-i bayān gašt）ように、ミールザー・ウルグ＝ベク・クレゲン mīrzā uluγ-bīk[8] kūrakān の話（riwāyat）では、かの勅命を浸透させる王（スルターン）たち（salāṭīn-i nāfiḏh-i farmān）の数は十九人である。これらのうち五人[9]は既に述べられた。他の十四人の状況が知られていないことの故に、言辞つたなき筆は、単に彼らの名前を数えることによって要約して、叙述の範疇のなかに書くことにする（qalam-i šikasta zabān ba-mujarrad ta'dād-i asāmī-yi īšān ixtiṣār namūda dar silk-i taḥrīr mī kišad）。すなわち、

第六のハーン qāān は、チンキムの子タルマ＝バラの子ハイシャンの子ホシライ qūšīlāy bn xayšank bn tarma balā' bn jīmkīm である。すなわち、［彼は］テムル・ハーン tīmūr qāān の継承者（qāyim maqām）であった[10]。

第七[11]　ホシライの子トクタイ tūqtāy bn qūšīlāy。

第八[12]　トゥレクの子タイズィ tāyzī bn tūlik。すなわち、統治（ḥukūmat）期に、彼はビリグトゥ bīliktū と呼ばれた。

第九　ダーラーの子アヌーシールワーン anūšīrwān bn dārā[13]【アユシリダラ】。すなわち、［彼は］賞賛すべき性格では飾られておらず（ba-axlāq-i ḥamīda ārāsta na-būd[14]）、ハーン位の地位における弱さが、彼の政権の時代に現れた（futūr dar manṣab-i qāānī dar zamān-i dawlat-i ū rūī namūd）。

第十[15]　テムル・ハーンの子トク＝テムル・ハーン tūq-timūr bn tīmūr qāān[16]。

第十一[17]　イェスル・ダーラー yīsūr dārā[18]。

第十二[19]　イェスル・ダーラーの子エンケ īnka【enke～äŋkä】bn yīsūr[20] dārā。

第十三[21]　エルベク・ハーン īlbak[22]【elbeg】qāān。

第十四[23]　グン＝テムル kun-timūr【gün-temür】。

第十五[24]　オロク＝テムル uruk-timūr【örüg-temür】。

第十六[25]　イルチ（*オルジェイ）＝テムル・ハーン īlčī[26] tīmūr qāān。すなわち、［彼は］、サーヒブ＝キラーン（両星の合の所有者）陛下（ḥaḍrat-i ṣāḥib qirān）アミール・テムル・クレゲン amīr tīmūr gūrkān【チムール】のもとに到り、かの陛下【チムール】の死後、ウルグ・ユルト uluγ yūrt（大帳）に行って、ハーン位の王座に座した（bar masnad-i qāānī nišasta）。

第十七　ダルタイ（*デルベク／*ダルバク）dāltāy[27]。すなわち、［彼は］、*アリク＝ブゲ ARTQ[28] būkā の子孫（nasl）出身であった。

第十八[29]　メリク＝テムルの子[31]オラダイ（*オイラダイ）ūradāy[30] bn malik tīmūr。

第十九[32]　オロク＝テムルの子アダイ adāy bn uruk-timūr【örüg-temür】[33]。

これら二子息[34]とも、アリク＝ブゲ arīq[35] būkā の後裔の範疇のなかに秩序を持った（dar silk-i aḥfād-i ARTQ būkā intiẓām dāštand）。

そして、『勝利の書（ẓafar nāma）[36]』の序章（muqaddama）から、次のように明らかになっている。すなわち、

アミール・テムル・クレゲン amīr[37] tīmūr kūrkān【チムール】の宮廷（āstān）に到り、かの陛下【チムール】の死後、カラ＝コルム qarā qurum に行って、ハーン qāān になった、ハーン（qāānī）は、タイズィ tāyzī［という］名［を］持っていた。

そして、タイズィ tāyzī の王（スルターン）政（salṭanat）より以前に、トングズ tunγūz［という］名の人が、ヒタイ xitāy において叛乱して、その国を手に入れていた（ān mamlakat rā ba-dast āwarda būd[38]）ので、カルマク qalmāq とカラ＝コルム qarā qurum から成っている本来のユルト（yūrt-i aṣlī）を除いて（γayr az[39]）、ひとつの場所［も］タイズィ tāyzī の占有（taṣarruf）に入らなかった。

そして、短期間後に（ba'd az andak zamānī[40]）に、タイズィ tāyzī は殺されて、オイラト ūyrāt[41] の部

将（アミール）たち（umarā-ʾi ūyrāt）が、カラ＝コルム qarā qurum とカルマク qalmāq を支配した。

至高なる神はまさしく最も博識である。

注

1）「オイラート」という表記が適切でないことは、夙に宮脇淳子 1981, p.60 において指摘されているとおりである。なお、私は、「オイラト」または「オイラド」という表記を用いている。

2）岡田英弘 1966, p.36, n.(6) に、「なほ本田実信氏が同じ問題を論ぜられたことがあるらしいが今見るを得ないのを遺憾とする」とあるが、この部分は、再録版の岡田英弘 2010, p.507, n.(6) では削除されている。なお、岡田英弘 1966 で使用されたモンゴル文年代記は、次の三点である（日本語表記は私の方法に従う）。

(1) 「トゥメト系」のロプサン・ダンジン『黄金史（アルタン・トプチ）』
（17世紀末）

(2) 「オルドス系」の『蒙古源流（エルデニイン・トプチ）』
（オルドスのウーシン旗のサガン・セチェン編。1662年）

(3) 「チャハル系」の『恒河の流れ（ガンガイン・ウルスハル）』
（ウジュムチン右翼旗のゴンボジャブ編。1725年）

著者不明『黄金史』が使用されていないのは、著者不明『黄金史』はロプサン・ダンジン『黄金史』に基づいて簡略化したものであると考えられた（岡田英弘 1965）ためである。しかし、著者不明『黄金史』がロプサン・ダンジン『黄金史』に先行する文献であることは、吉田順一 1974によって立証されたとおりである。森川哲雄 2007 をも参照されたい。

3）スレイマニエ図書館では、古文書・古文献のCD画像化が進み、画像の入手は容易になったが、代わりに、写本の原物を閲覧することが、以前よりも困難となった。ちなみに、Damad İbrahim Paşa 901 と Reisülküttab 638 のCD整理番号は、それぞれ CD 14897 と CD 15581 である。

4）両写本に関する紹介は、別稿に譲る。なお、ホーンダミールについては、久保一之 2014 をも参照されたい。

5）「nišasta and」。THS/DIP901 による。THS/RK638 : nišastand.

6）THS/RK638は欄外に「ウルグ・ユルト（大帳）ūluγ yūrt の皇帝たち（pādišāhān）［について］の言及」と見出しがある。

7）「ハンたち（xānān）」。テヘラン刊本では「ハカン（xāqān）」。

8）「uluγ-bīk」。THS/DIP901に従う。THS/RK638 : uluγ bīk.

9）オゴデイ、グユク、モンケ、フビライ、テムルの五人。

10）この一文は、THS/DIP901 では欄外に補書。

11）「第七」。THS/DIP901 では空いている（退色か。以下同じ）。

12）「第八」。THS/DIP901 では空いている。

13）「anūšīrwān bn dārā」。原形は、「アユーシリダラ ayūšīrī dārā」であったと推定されるが、その中にアヌーシルワーン（ホスロウ一世）およびダーラー（ダリウス）とアラビア文字表記が類似した部分があるため、誤りが生じたものである。

14）「ārāsta na-būd」。テヘラン刊本では「ārāsta būd」すなわち「飾られていて」。

15）「第十」。THS/DIP901 では空いている。

16）「tūq-timūr bn tīmūr qāān」。「トクズ＝テムル・ハーン tūqūz tīmūr qāān」とあるべきもの。THS/RK638 : tūq-timūr qāān.

17）「第十一」。THS/DIP901 では空いている。

18）「yīsūr dārā」。THS/RK638 に従う。原形は「イェスデル yīsūdār (yesüder)」。THS/DIP901 : bīsūr dārā. このイェスデルがフビライの弟アリク＝ブゲの後裔であることは、甲種本『華夷訳語』所収「捏怯来書」（栗林均 2003, pp.102-105）に、「阿里孛可 arïbökö のウルク（uruγ）の大王（kö'ün）也速迭児 yisüder」とあるとおりである。

19）「第十二」。THS/DIP901 では空いている。

20）「yīsūr」。THS/DIP901, THS/RK638 には、共に「bīsūr」とあるが、「yīsūr」とあるべきもの。

21）「第十三」。THS/DIP901 では「第十四（čahār-dahum）」の前半部分「čahā」が抹消されているように見える。

22）THS/DIP901 の AYLBK に従う。THS/RK638 : AYLYK.

23）「第十四」。THS/DIP901 では空いている。

24）「第十五」。THS/DIP901 では空いている。

25）「第十六」。THS/DIP901 では空いている。

26）「īlčī」。アラビア文字の転字（transliteration）は「AYLČY」。原形は「ALJY」すなわち「uljay (öljei)」であったと考えられる。

27）「dāltāy」。アラビア文字の転字（transliteration）は「DALTAY」。原形は「DALBAK」すなわち「dālbāk

（delbeg〜dalbag）」であったと考えられる。
28）「ARTQ」。原形は「ARYQ」すなわち「arīq」。
29）「第十八」。THS/DIP901 では空いている。
30）「ūradāy」。アラビア文字の転字（transliteration）は「AWRDAY」。原形は「AWYRDAY」すなわち「ūyradāy（oiradai）」であったと考えられる。
31）「メリク＝テムルの子」。このメリク＝テムルは、アリク＝ブゲの二男であるメリク＝テムルに比定されている。ここでは「子（bn）」は子孫という意味で理解すべきものである。
32）「第十九」。THS/DIP901 では空いている。
33）「adāy bn uruk-timūr」。THS/DIP901 に従う。THS/RK638 : ūdāy（AWDAY）bn uruk-timūr.
34）「二子息」。THS/DIP901 の「du pisar」に従う。THS/RK638 とテヘラン刊本では「二人（du kas）」。
35）「arīq」。THS/RK638 の「ARbQ」に従う。THS/DIP901 : ARTQ.
36）ヤズディー yazdī の『勝利の書』。
37）「amīr」。THS/RK638 になし。
38）「āwarda būd」。THS/DIP901 に従う。THS/RK638 : āwarda būd wa.
39）「γayr az」。THS/DIP901 に従う。THS/RK638 : γayr-i.
40）「andak zamānī」。THS/DIP901 に従う。THS/RK638 : zamānī.
41）「オイラト ūyrāt」。THS/DIP901 に従う。THS/RK638 には「彼（ū）」とある。

研究文献

安藤志朗「ティムール朝國制 —— Diez A. Fol.74 未完成ミニアチュールより ——」『東方學』第八十七輯, 1994.1, pp.1-17.

薄音湖（ボヤンフ）「關于北元汗系」『内蒙古大學學報（哲學社會科學版）』一九八七年 第三期, 1987.7.

HONDA Minobu, "On the genealogy of the early Northern Yuan". *Ural-Altaische Jahrbücher,* XXX-314, 1958. 本田実信『モンゴル時代史研究』（東京大学出版会, 1991.3）, pp.595-619 に再録。なお、再録版の一覧表には、系図の線が引かれていないので、初出論文を見る必要がある。

久保一之「ミール・アリーシールの家系について ——ティムール朝における近臣・乳兄弟・譜代の隷臣・アミール——」『京都大学文学部研究紀要』第53号, 2014.3, pp.141-233.

栗林均編著『『華夷訳語』（甲種本）モンゴル語全単語・語尾索引』（東北アジア研究センター叢書 第10号）仙台, 東北大学東北アジア研究センター, 2003.3.

宮脇淳子「十七世紀のオイラット ——「ジューン・ガル・ハーン国」に対する疑問 ——」『史学雑誌』第九十編第十号, 1981.10. pp.1520-1543.

宮脇淳子「モンゴル＝オイラット関係史 —— 十三世紀から十七世紀まで——」『アジア・アフリカ言語文化研究』25号, 1983.3, pp.150-193.

森川哲雄『モンゴル年代記』白帝社, 2007.5.

岡田英弘「ダヤン・ハガンの先世」『史学雑誌』第七十五編第八号, 1966.8, pp.1-38. 岡田英弘 2010, pp.248-298, 506-509 に「ダヤン・ハーンの先世」と改題して再録。

岡田英弘「ダヤン・ハガンの年代」（上）『東洋学報』第四十八巻第三号, 1965.12, pp.1-26. 岡田英弘 2010, pp.202-247, 502-506 に、「ダヤン・ハガンの年代」（下）と併せ、「ダヤン・ハーンの年代」と改題して再録。

岡田英弘『モンゴル帝国から大清帝国へ』藤原書店, 2010.11.

吉田順一「ロプサン・ダンジンの『アルタン・トプチ』と著者不明『アルタン・トプチ』」『史観』第八十九冊, 1974.3, pp.60-76.

原文

ذکر اسامی سایر پادشاهانی که بعد از فوت تیمور قاآن در الغ یورت بر مسند خانی نشسته اند[1]

چنانچه در مقدمه داستان خانان قرا قرم و کلوران مرقوم کلک بیان گشت بروایت میرزا الغبیک[2] کورکان عدد آن سلاطین نافذ فرمان نوزده نفرست و ازینجمله پنج نفر مذکور شدند و بنابرانکه احوال چهارده نفر دیگر نا معلوم است قلم شکسته زبان بمجرد تعداد اسامی ایشان اختصار نموده در سلک تحریر می کشد که

قاآن ششم قوشیلای بن خیسنک بن ترمه بلاء بن جیمکیم است ☆ که قایم مقام تیمور قاآن بود[3]

هفتم[4] توقتای بن قوشیلای

هشتم[5] تایزی بن تولک که در زمان حکومت او را بیلکتو خواندند

نهم انوشروان بن دارا که باخلاق حمیده آراسته نبود و فتور در منصب قاآنی در زمان دولت او روی نمود

دهم[6] توقتمور بن تیمور قاآن[7]

یازدهم[8] ییسور[9] دارا

دوازدهم[10] اینکه بن ییسور[11] دارا

سیزدهم[12] ایلبک[13] قاآن

چهاردهم[14] کنتمور

پانزدهم[15] ارکتمور

شانزدهم[16] ایلجی تیمور قاآن که بملازمت حضرت صاحب قران امیر تیمور کورکان رسید و بعد از فوت آنحضرت بالغ یورت رفته بر مسند قاآنی نشست

هفدهم دالتای که از نسل ارتق بوکا بود

هژدهم[17] اوردای بن ملک تیمور

نوزدهم[18] ادای[19] بن ارکتمور

و این دو پسر[20] نیز در سلک احفاد اریق[21] بوکا انتظام داشتند

و از مقدمهٔ ظفر نامه چنان معلوم میشود

که قاآنی که بآستان امیر[22] تیمور کورکان رسید و بعد از فوت آنحضرت بقرا قرم رفته قاآن گردید تایزی نام داشته

و چون قبل از سلطنت تایزی تنغوز نامی در ختای خروج کرده آن مملکت را بدست آورده بود[23] غیر از[24] یورت اصلی که عبارت از قلماق و قرا قرم است موضعی بتصرف تایزی در نیامد

و بعد از اندک[25] زمانی تایزی کشته گشته امرآء اویرات[26] بر قرا قرم و قلماق مستولی شدند

و الله تعالی اعلم بحقیقة الحال

1. RK638: نشستند.
2. RK638: الغ سک
3-☆. DIP901 欄外補書
4. DIP901 空き
5. DIP901 空き
6. DIP901 空き
7. RK638 توقتمور قاآن
8. DIP901 空き
9. DIP901 بیسور
10. DIP901 空き
11. DIP901,RK638 بیسور
12. DIP901 چهار دهم
13. RK638 ایلیک
14. DIP901 空き
15. DIP901 空き
16. DIP901 空き
17. DIP901 空き
18. DIP901 空き
19. RK638 اودای
20. RK638 کس
21. RK638 اریق. DIP901 ارتق
22. RK638 無
23. RK638 و 増
24. RK638 無
25. RK638 無
26. RK638 او